生命の燃焼とヘレニストとしての岡先生

内田次信

病魔に身体の髄まで蝕まれつつあった岡先生が、生命の最後の焔を燃やし尽くすまで激務の責をつとめ、綿密な考証を構築した著述に打ちこんで、己れに解怠を許さなかったそのお姿は、われわれの大方が予期していた以上にご病状が深刻に進行していただけに、ひときわ感嘆の念を抱かせる。

強靱な精神は、論理力や、やはり先生が衆に優れて恵まれていた記憶力などとともに、多くはもって生まれた特質であるのかもしれない。しかし、卓越した学者として長年にわたり西洋古典を研究し味わい、その真髄をわが身の一部になしていた先生が病魔に対峙したときの支えが、ただ遺伝的な能力あるいは誠実なお人柄のみであったとは考えにくい。

先生の晩年に属するご著作として、「古代ギリシア人の人間観」という論考がこのほど公にされた(『姫路人間学研究』第3巻第1号、2000年3月)。平成7年に姫路独協大学において行なわれた公開講座の一環としてのご講演に基づくもので、「人間とは、自分とは何か —— 哲学・心理学と生命科学をつなぐ——」というその公開講座のテーマに沿って、古代ギリシア人の哲学的宗教的人間把握を論説するそのご文面からは、彼らの思索の記念碑を共感とともに読み解きながら、科学がある面では人類の本質・存続を脅かしうるほどにいびつな技術的発展を表わしつつある現代においてもなお——あるいはそれだからこそ一層のこと——われわれが指針と仰ぎうる智をそこに再確認して、人間にふさわしい生のあり方をそれに基づき聴衆に説こうとする壇上の先生のお姿が髣髴としてくるように思える。

より古い時代のギリシア人の間では、ないし貴族的な文学においては、人間を、人間でないものとしての神すなわち不死なるものと対比しつつ、その存在のはかなさを戒めて、「人間の分に応じて人間らしく振る舞うこと」を諭した。しかし——と先生は説く—— 、他方ではまた「人間は、自分が惨めなはかない存在であるという自覚から、惨めな状況を克服するものを求める」ようになる。存在の惨めさは、「人間を打ちひしぐどころか、かえって奮い立たせ」、「不老不死の神々に比べるなら夢幻のような人間は、その惨めな短い人

生において、永遠の生命を享受する神々よりもはるかに充実した生を送ることができる」。貴族的人間にあってはそれはもっぱら武勇などの働きにおいて目指される。

そのような、はかないはずの自己の存在へのまだ控えめな誇りは、アテナイに集う先進的な思想家・詩人の間で、神よりも人間自身を物事の尺度に据える考え方となって顕在化する。

それは人間の理性への自負に動かされている。アリストテレスが、「われわれはできるかぎり不死なる者となるべきである。そして、われわれ自身の中にある最高のものに即して生きるためにあらゆる努力を払うべきである」と述べるとき、それは理性を通じて永遠不滅の存在の世界に近づこうとする崇高な祈念を表わす。

とはいえそれは、神を押しのけて人間が世界の王者になろうとすることではなかった。理性への信頼は、教養を人間の理想とするにいたる。そのような理想的教養人は、「人間にとって犯しがたい（宇宙の）秩序」が厳然としてあることを確認し、その「背後にある・・・永遠的普遍的なもの」を理解しようと志す。それを「神」と呼ぶにせよ別の言葉でそうするにせよ、その認識こそが「完全な人間」を可能にする。

以上は、先生のご文章に筆者のアレンジをいくぶん加えて引用した。先生の他の本格的な深耕的なご論考に比べれば概説的小篇であるが、ギリシアで行なわれた人間の本質論の核心を、あたかもわが思い・信念として陳述し披瀝されている感がある。

人間存在への矜持と理知的な謙虚というギリシア的精神の指向と叡知が、先生において、静かな慎ましいお人柄のうちに知性的にして剛毅な心魂を宿しておられたありようを形作っていたのではないか。

ともあれ、先生の精神世界は広大高遠で、筆者のような凡庸蒙昧な者には窺い知れない面が残る。遺された浩瀚な内容豊かなご著作を繰り返しひもときつつ、岡先生とはどのような人であったのかと、生涯をかけて仰ぎ想い続けたい。